

— 津和野デジタルテレビ中継局送信設備整備工事に伴う発掘調査報告書 —

陶晴賢本陣跡 II

2009年3月

島根県津和野町教育委員会

— 津和野デジタルテレビ中継局送信設備整備工事に伴う発掘調査報告書 —

陶晴賢本陣跡 II

2009年3月

島根県津和野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成20年度（2008）において、日本放送協会松江放送局、日本海テレビジョン放送株式会社、株式会社山陰放送、山陰中央テレビジョン放送株式会社の委託を受け実施した津和野デジタルテレビ中継局送信設備整備工事予定地内「陶晴賢本陣跡Ⅱ」の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　　島根県教育委員会文化財課
　　　　　　津和野町文化財保護審議会委員　　松島　弘

事務局　　津和野町教育委員会　教育長　　齋藤　誠
　　　　　　教育次長　　廣石　修
　　　　　　文化財係　　米本　潔

調査員　　津和野町教育委員会文化財係長　　中井　将胤
　　　　　　文化財係　　宮田　健一

調査補助員　永田　茂美　　椋木　牧子　　麻野　遼

調査参加者　佐伯　昌俊　　森川リユ子　　岩本　光子　　弘奥　長生
　　　　　　坂本　勝義　　久保　政幸　　森本　定見

3. 発掘調査に際しては、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、地元の方々にご協力を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、土坑-SKと略号している。なお、編集に利用した現地地図は、津和野土地改良区の協力を得た1/25,000の縮尺のものであり、現地における基準点測量及び地形図（1/1,000）は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

5. 調査に伴う記録類は、津和野町教育委員会で保管している。

6. 本書は宮田・永田・椋木・佐伯・麻野氏の協力のもと、中井将胤が編集にあたった。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第2章 地区の概況	2
第1節 地理的環境と地形的立地	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査概要	8
第1節 調査区の設定	8
第2節 層序と層位	9
1. はじめに	9
2. 層序状況	9
第3節 遺構	10
1. はじめに	10
2. 検出遺構	10
3. 自然科学分析	12
第4章 小 結	16

挿図・図表目次

第 1 図 位置図	1
第 2 図 地形断面図	2
第 3 図 位置と周辺の遺跡分布	4
第 4 図 陶晴賢本陣縄張図	5
第 5 図 陶晴賢本陣跡全体測量図	7
第 6 図 調査区配置図	8
第 7 図 土層図	9
第 8 図 遺構配置図	11
第 9 図 S K 0 1 · 0 2 断面図	11
第 1 表 検出遺構計測表	10

図 版 目 次

図版 1	1 調査地点鳥瞰	17
図版 2	1 陶晴賢本陣跡近景（北から）	18
	2 陶晴賢本陣跡から見た津和野城と城下町	18
図版 3	1 調査前状況（北から）	19
	2 調査前状況（南西から）	19
図版 4	1 A調査区東壁	20
	3 B調査区東壁	20
図版 5	1 SK01検出状況	21
	2 SK01完掘状況	21
図版 6	1 SK02検出状況	22
	2 SK02半掘状況	22
図版 7	1 発掘調査完掘状況（北西から）	23
	2 発掘調査完掘状況（西から）	23
図版 8	1 A区擾乱状況	24
	2 発掘作業風景	24

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

平成20年2月22日、日本放送協会松江放送局より松江・津和野アジタル中継局送信設備整備工事地内の埋蔵文化財の有無、及び取扱いについての協議が津和野町教育委員会になされた。

これに対し、今回の建設予定地は陶晴賢本陣の主郭の一部であることから、建設場所の変更を協議したが、既に変更計画は難しい状況にあり、テレビ放送の利便性、今日性も考えれば工事はやむを得ないものと判断した。

平成20年2月25日、津和野町教育委員会は、島根県文化財課の指導により、工事予定地内を工事着手前に発掘調査を行う必要がある旨を回答した。同年3月14日付で島根県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、そして4月2日に依頼を受け、4月10日より現地調査を実施した。



第1図 位置図

第2節 発掘調査の経過

発掘調査を開始するにあたり、調査対象範囲を決めるため、NHK側の工事担当者が現地において工事範囲を設定しその範囲全体を調査区として発掘調査を開始した。

発掘調査が後半に差掛かった段階で、文化財コンサルタント(株)の渡辺氏に依頼をしてそれまでに検出された遺構等の年代想定をするため来踪された。そして、現地調査は平成20年5月12日に無事終了した。

さらに、調査報告書を作成する段階においては、県文化財課の西尾克己氏に指導を受けた。

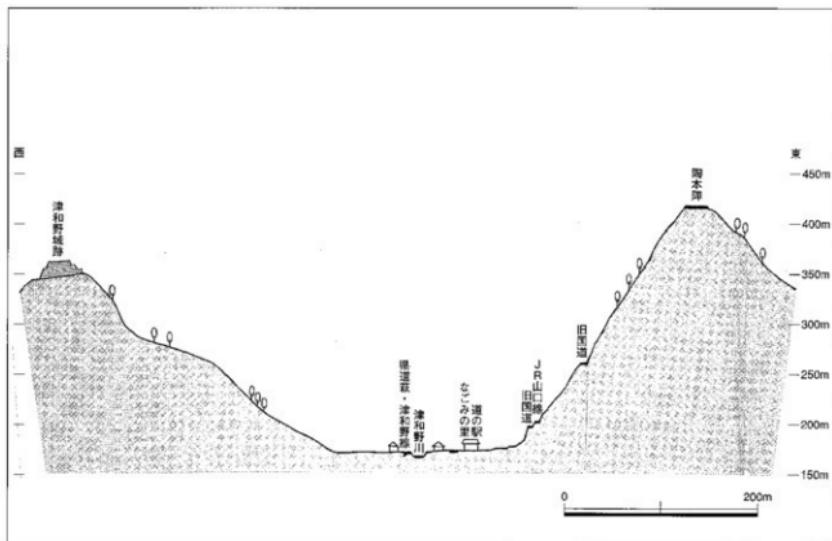
第2章 地区の概況

第1節 地理的環境と地形的立地

本遺跡が所在する津和野町は、島根県西部に位置（第1図）し、北・東側が益田市、南側が吉賀町、西側が山口県に接した位置に存在する。そして、東西27km、南北19kmを測り、総面積高津307.09kmとなる。また、総面積の約8割以上が山林で、高津川や津和野川の流域とその支流が入り込み、流域に市街地、集落、農地が点在し、まさに典型的な中山間地域である。

陶晴賢本陣跡は、島根県津和野町中座1680-2番地に所在し、本町の南東部にあたる山口県との県境に位置する。該当地は西から北東方向に流下する津和野川の右岸にあり、標高約420m、比高約220mを測る位置に立地している（第2図）。また、正面北側には津和野川を隔てて津和野城がある。そして、津和野川をはじめとする河川沿いに200~300mの平野部が城下町を含めて広がり、400m級の山々、さらに900m級の山々がそびえて周囲を囲む形で盆地状の地形を形成している。

そして津和野城、城下町が一望できる位置にこの陶晴賢本陣はある。



第2図 地形断面図

第2節 歴史的環境

津和野町には、これまでに多くの遺跡等が確認され発掘調査等を実施しており、今のところ後期旧石器時代にまで遡る。旧石器は町内で唯一ナイフ形石器が喜時雨遺跡から出土している。また、縄文時代以降の遺跡も数多く点在しており、開発等に伴いそれらの遺跡の一部は発掘調査等によって解明されつつある。

本地区周辺の遺跡は、地形は、津和野川が西から北東へ流れ、津和野川付近は高田盆地という立地から多くの遺跡が点在している（第3図）。古い時代としては、高田遺跡や山崎遺跡からは縄文時代早期の土器が出土している。また、本調査地の麓である大蔭遺跡は縄文後期から奈良・平安時代の遺跡であり、さらに中世以降の遺跡も多く点在する地域である。

そして北側にある標高350mの山頂には津和野城（石垣）現存し、その東側麓には城下町が広がっている。また、陶本陣がある山の東側には江戸期に整備された当時の主要街道である山陰道が良好な状態で現存している。

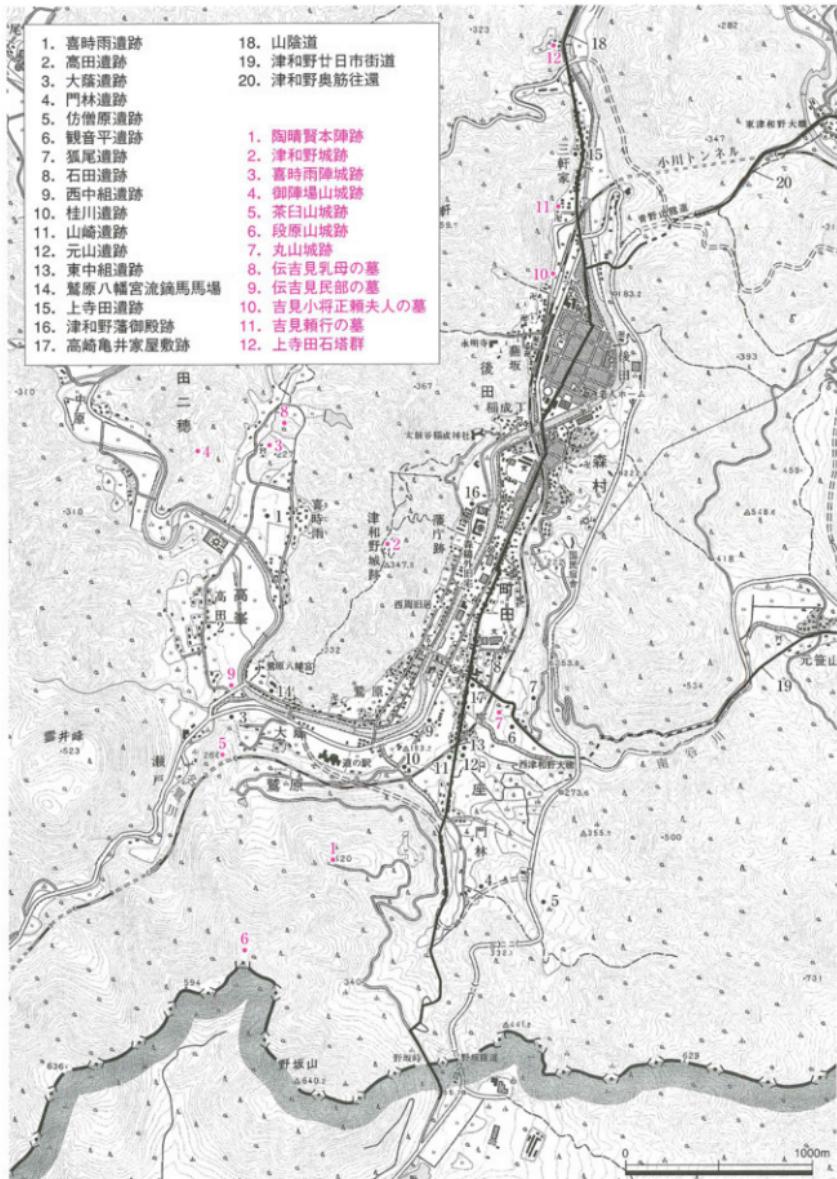
中世津和野の領主吉見氏は、弘安5（1282）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14世紀に津和野城を構えたと伝えられている。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同時に存在していたとするのが通説である。

本陣を構えた陶晴賢は、天文20（1551）年、主君である大内義隆を自害に追いやったあと、益田氏と共に、吉見氏を挟み撃ちにしようとした。そのため領主であった吉見正頼は、主君であり、また義弟であった大内義隆の弔いのため、天文22（1553）年、陶晴賢討伐を宣言し、戦が始まったのである。討伐宣言後、陶晴賢は幾度となく吉見氏と激戦を繰り広げていたものの吉見氏を滅ぼすことはできず、天文23（1554）年3月この地に陣を構えたのであった。そして12回の激戦の末、4月17日頃から戦況が変化し、ついに吉見正頼は津和野城の尾根沿いにある下瀬山城に後退することとなったのである。

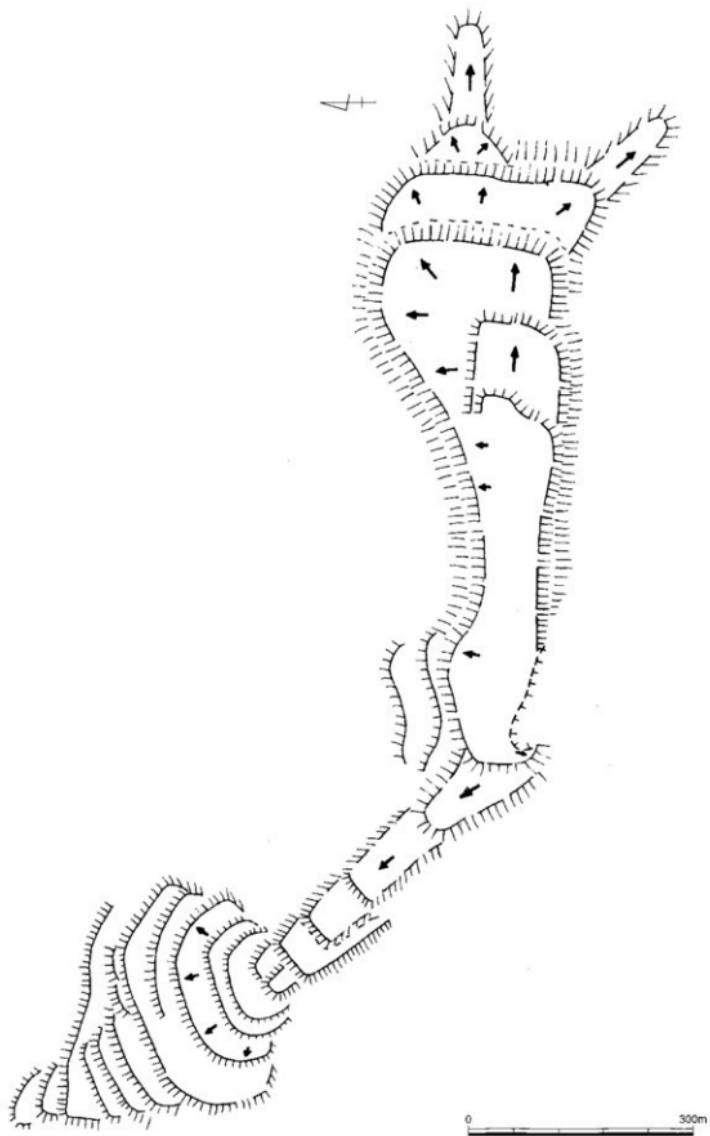
陶軍は8月2日に全面攻撃をかけ、多くの死傷者を出す接近戦を繰り広げたが、それでも毛利氏と連携をとっていた吉見氏は最後まで抵抗を続け、9月に入り尼子氏調停のもと正式に和解し、一年もの長期に亘る戦が終わつたのである。



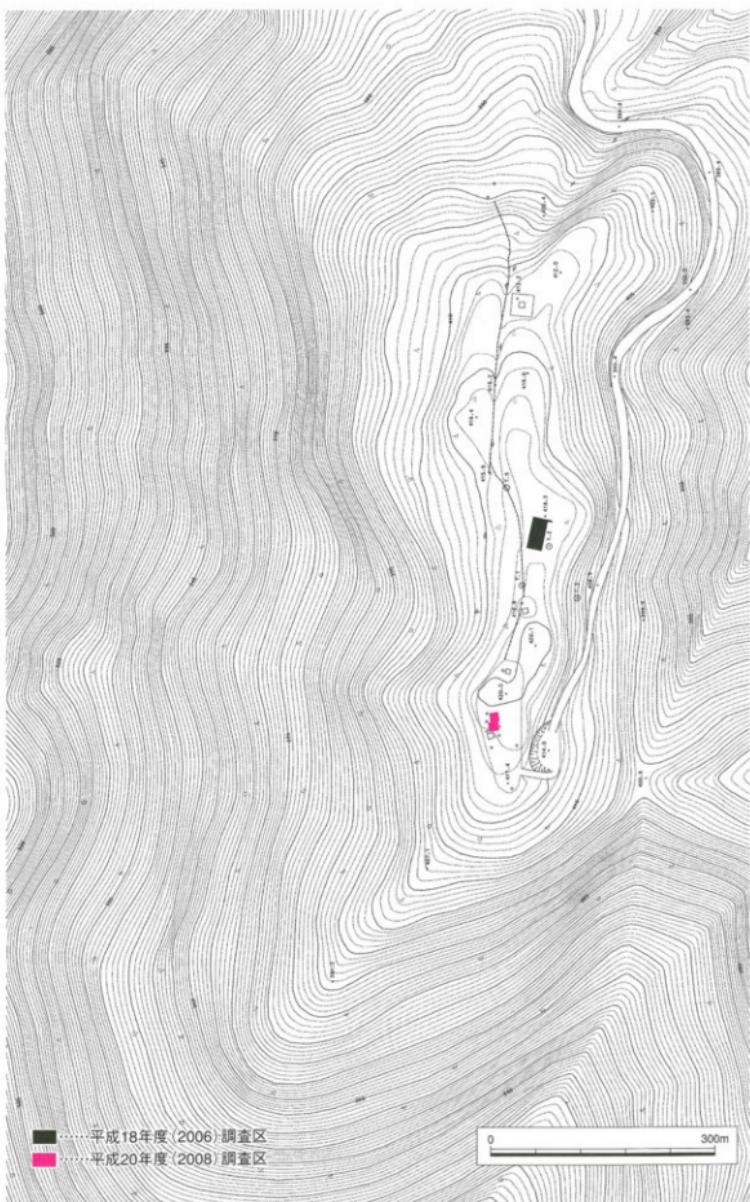
陶ヶ嶽（津和野百景より）



第3図 位置と周辺の遺跡分布



第4図 陶晴賢本陣縄張図



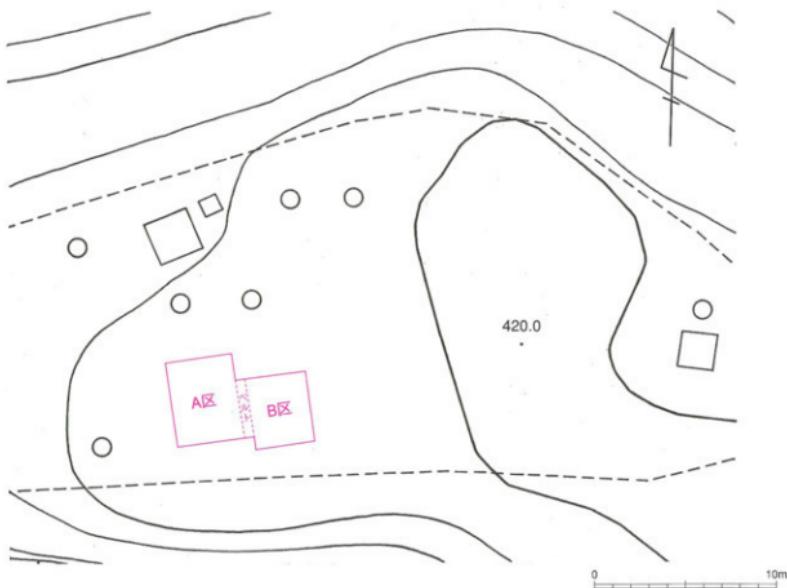
第5図 陶晴賢本陣跡全体測量図

第3章 調査概要

第1節 調査区の設定

今回の鉄塔や付随施設等の建設予定地は、約34m²であり全面発掘調査をすることにした。開発予定期間を基に東側に4m×3.5m=14m²の方形に設定し、50cm幅のベルトを設けその西側に4.8m×3.7m=17.76m²の長方形の調査区を設定した。そして、西側をA区、東側をB区とし、調査面積は、ベルト部分を含めて合計約34m²を測る（第6図）。最終的に、A・Bの調査区の間にあるベルトは掘削した。

なお、平成18年度で調査した場所は本地区より約150m東側である。（第5図）



第6図 調査区配置図

第2節 層序と層位

1. はじめに

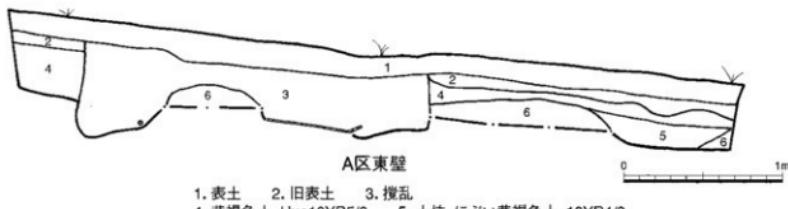
本節で記している土層の色彩は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人 日本色彩研究所が監修している、小山正忠・竹原秀雄 著『新版 標準土色帖 2004年版』を使用している。

2. 層序状況

本遺跡のA区西側の基本層序は、1層の表土、2層は旧表土、3層は擾乱層、4層は黄褐色土(10YR5/6)、5層はにぶい黄褐色土(10YR4/3)、6層は明黄褐色土(10YR6/6)で地山であると考えた。また、B区西側の基本層序は、1層の表土、2層は旧表土、3層は黄褐色土(10YR5/6)、4層は明黄褐色土(10YR6/6)、5層は明黄褐色土(10YR7/6)で地山と考えられた(第7図・図版4)。

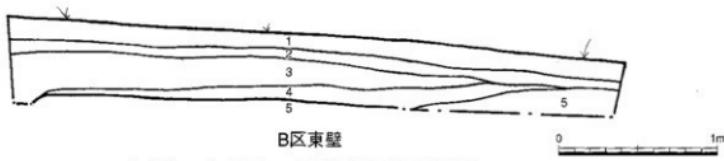
以上のようにA・B区の基本層序を見たが、A区の約半分が擾乱を受けていることからB区の東壁から検証することにする。まず、現在の地表面であるが、僅かに南側が低く傾斜している。そして1・2層まではそれと並行に堆積しており、3・4層については南側端には確認できず地山が2層下に現れる。このことから、この山の本来の高い部分は南側であり(現在は調査区の北側が高い)、陶軍が山城を築く際に尾根部を掘削し、北側へ盛土して平坦な平場を作ったのではないかと考えられた。おそらく4層上面が水平であることから当時の表面であると思われた。

419.932m



1. 表土 2. 旧表土 3. 摆乱
4. 黄褐色土 Hue10YR5/6 5. 土坑にぶい黄褐色土 10YR4/3
6. 明黄褐色土 Hue10YR6/6

419.932m



1. 表土 2. 旧表土 3. 黄褐色土 Hue10YR5/6
4. 明黄褐色土 Hue10YR6/6
5. 明黄褐色土 Hue10YR7/6

第7図 土層図

第3節 遺構

1. はじめに

本節で述べる遺構については、土構をSKと略号した(第8、9図・図版5、6)。

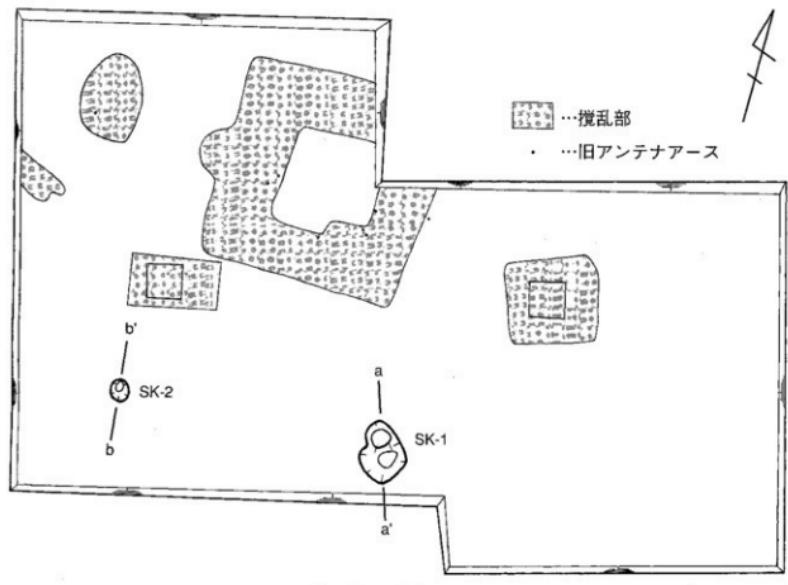
2. 検出遺構

SKと称した遺構は、2箇所検出された(第1表 検出遺構計測表)。SK01は、炭化物を含んだ遺構で40cm×60cmの方形、深さ約18cmを測る。この遺構からは、炭化物が検出されている。人工的に地面上に穴を掘って、そこで火を燃していることは確かであるが遺構の用途については不明である。また、ここから検出された炭化物については、自然科学分析を行っているので、その結果については事項で述べる。SK02は、20cm×20cmのほぼ円形で深さ10cmを測る。この遺構の用途についても不明である。

以上、簡単にSK01、02について述べたが、狭い範囲の調査であり、また攪乱を受けている部分が多いので、その他の遺構は確認することができなかった。いずれの遺構も遺物等を伴わない状況での検出であった。そのため、作られた時期や用途については不確定な部分が多い結果となった。

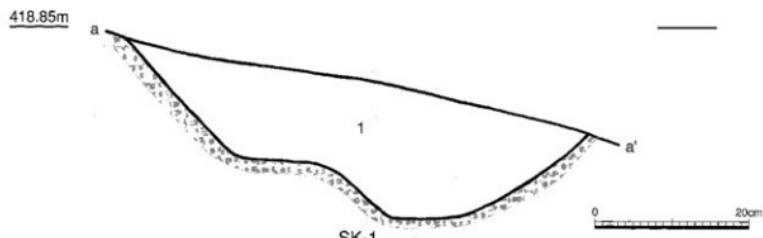
SK	上面(標高)	下面(標高)	深さ(cm)	直径(cm)	備考
SK-1	418.65	418.6	約18	約62	炭化物有
SK-2	418.75	417.95	約10	約20.5	

第1表 検出遺構計測表

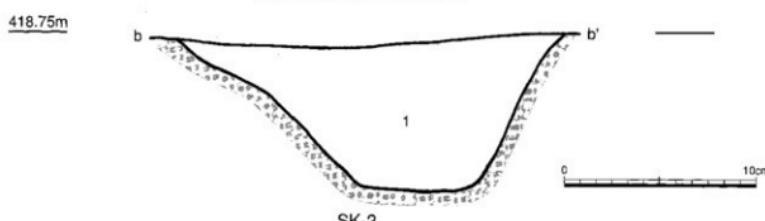


第8図 遺構配置図

0 1m



1. にぶい黄褐色土 Hue10YR4/3



1. 梅灰色土 Hue10YR5/1

第9図 SK 01・02断面図

第4節 年代測定

1. 分析試料について

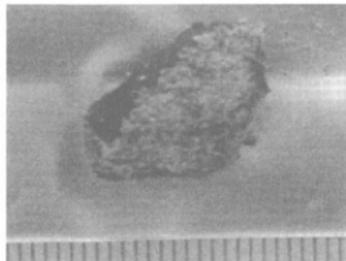
2-1 試料採取地点

図2-1に試料採取地点を示す。平面図は、津和野町教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成した。



図2-1 試料採取地点

2-2 年代測定試料



試料の概要

試料名：TS-1

重 量：0.2864 g

試料の種類：炭

図2-2 年代測定試料 (TS-1)

2. AMS年代測定方法

(1) 原理

大気圏上層で熱中性子化した宇宙線が、窒素原子と原子核反応 ($^{14}\text{N} + \text{n} \rightarrow ^{14}\text{C} + \text{H}$) を起こして放射性炭素 (^{14}C) が生成される。この放射性炭素 (^{14}C) は、 CO_2 として炭素リザーバー（大気 1.6 %、腐植 2.6 %、生物圈 0.8 %、浅海 2.0 %、深海 93%）に貯蔵され、一方では 5568 (5730) 年の半減期で β^- 壊変をおこす。光合成等の生命活動を通じて生物体に固定される。

^{14}C の初期量は、それぞれの生命活動の行われたリザーバーにおける ^{14}C の平衡状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えられる。つまり、生物遺体中の ^{14}C 濃度を測定し、現在の ^{14}C 濃度とくらべることにより、その生物が死んでから現在（ただし、1950 年を現在とみなす）までの経過年数がわかる。

(2) 前処理及び測定方法

1) 前処理

塩酸による酸洗浄（試料により、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理）。

2) 試料の調整

酸化銅とともに加熱し、二酸化炭素を生成。

精製ラインにおいて水、二酸化硫黄などの不純物を除去。

精製した二酸化炭素を水素と鉄とともに加熱し、グラファイトに調整。

アルミ製ターゲットホルダーにプレス圧入

3) 測定

AMS（加速器質量分析）法による。

タンデム型イオン加速器を用い ^{14}C 濃度を測定する。

4) 年代計算

年代計算を行う際には、 ^{14}C の半減期を 5568 年として行う。

5) 補正計算

$\delta^{13}\text{C}$ を測定・算出し、4) で得られた年代値を補正する。

6) 曆年代較正

0xCal ver 4.0.5 を用い、INTCAL04 データを利用して算出する。

3. AMS年代測定結果

測定結果を表4-1に示す。

表4-1には、補正¹⁴C、曆年較正用年代、曆年較正年代（1σ、2σ）の4種類の年代値とδ¹³Cを示してある。

測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。¹⁴C濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5568年）を用いて計算した値である。

補正¹³Cは、後記曆年較正用年代の、1の位を「0」、「5」で丸めたものである。

曆年較正用年代は、¹⁴C濃度が環境により変動することから、δ¹³Cを測定し、δ¹³C = -25‰に規格化した¹⁴C濃度を求め、年代値を算出したものである。

上記の年代は、いづれも西暦1950年からさかのぼった年代値である。

一方曆年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の¹⁴C濃度を、樹木の年輪や海底堆積物の縞（しま）状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた曆年代較正データ（INTCAL04）を用いて、曆年較正用年代を較正したものである。

図4-1 年代測定結果

試料 No.	遺構名	状態	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C (yrBP)	曆年較正用年代 (yrBP)	曆年較正年代		測定番号 (PLD-)
						1σ 年代範囲	2σ 年代範囲	
1 (TS-1)	SK-2	炭化材 乾燥	-27.64 ± 0.16	1225 ± 20	1226 ± 22	AD721–741 (13.3%) AD770–826 (40.8%) AD841–863 (14.0%)	AD694–748 (23.0%) AD765–881 (72.4%)	10848

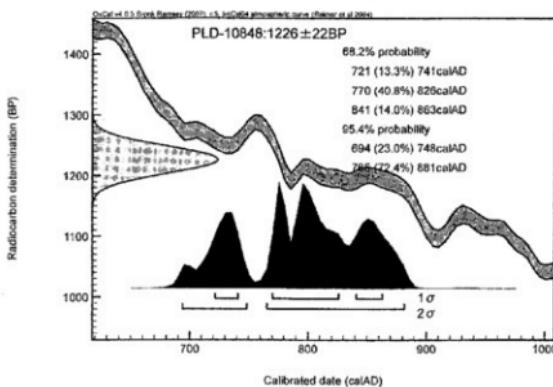


図4-1 曆年較正結果

4. 得られた年代値について

調査地点は、天文23年（1554年）の三本松城（津和野城）を中心とした攻防戦の際に、陶晴賢が本陣を置いたとされる場所であった。このことから、年代測定を行った炭片が採取された遺構（SK-2）は、陶晴賢の本陣に由来するものと考えられていた。

今回得られた年代はAD694～881年（飛鳥～平安時代前期）であり、予想された年代と大きく離れるものであった。一方、平成18年度調査に伴う遺構内から採取された炭片のAMS年代も今回とはほぼ同じAD680～870年（飛鳥～平安時代前期）であった（渡辺正巳, 2007）。

通常、樹木を用いた年代測定値は遺構の年代より古くなる傾向にある。これは、樹木の成長に関係現象と考えられているが、700～900年という値は、樹木の成長に伴う誤差とするには離すぎた値である。したがって得られた年代値からは、今回の遺構が天文23年（1554年）の陶晴賢本陣に関係したものであった可能性は極めて低く、飛鳥～平安時代前期の遺構であると考えられる。

天文23年（1554年）の吉見正頼攻めに際して陶晴賢がこの地に本陣を築いたことは史実であるが、本陣の作り方や戦場での生活について再考する必用があるかも知れない。また、遺物が出土していないものの古代の遺構が検出されており、この地での営みについても考える必用があろう。

6.まとめ

天文23年（1554年）の陶晴賢本陣跡に関すると考えられる遺構内の埋土中の炭片を対象に、AMS年代測定を実施した。しかし、得られた年代値は飛鳥～平安時代前期を示すものであったことから、この遺構は陶晴賢本陣と関係が無く、古代の遺構であったと考えられる。平成18年度調査でも同時期（古代）の炭片を含む遺構が検出されており、戦国時代における本陣の作り方や戦場での生活について再考する必用があるかも知れない。

文化財コンサルタント㈱ 渡邊正巳氏

第4章 小 結

今回調査を実施した地点は、陶晴賢本陣跡として築かれた山城の一部分である。しかも、開発事業に伴う緊急の調査であったため、調査日数、調査面積とも制限された状況であり、さらに城全体のわずか数%が調査対象であった。

その成果から城の全貌を明らかにすることは困難である。しかし、今回の調査区周辺は、土層などから考察して尾根を削平して平坦地を作ったことが確認できた。また、用途は不明で僅かではあるが土坑などの遺構も検出された。

また、検出された土構の一つは、年代測定によると奈良から平安期のものであるとの結果が得られた。前回調査（平成18年度）した時においても今回と同じような遺構が確認されていることから、中世において山城として整備する以前にも何らかの施設などがこの場所にあったと思われた。

そして、出土遺物が皆無であったこと、検出遺構が少なかった事実は、吉見氏系の山城として整備されたものではなく、天文の役の時だけに使用された僅か5ヶ月の期間であったことと関係があるのではないかと考えられた。また、想像の域は越えないが、この場所は津和野城を監視するためには最適な立地であることから、見張場的な要素をもつ施設があったのではないかと思われた。

参考文献

- 沖本常吉編『津和野町史』第一巻 津和野町史刊行会 1970
沖本 博著『吉見氏とその時代』 津和野歴史シリーズ刊行会 1997
『津和野城跡基本構想策定報告書』 津和野町教育委員会 2003
『陶晴賢本陣跡』 津和野町教育委員会 2007

引用

- 第4図 陶晴賢本陣縄張図は、『石見の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書
〈第1集〉4 主要城館跡の解説・略測図より転載



1 調査地点鳥瞰



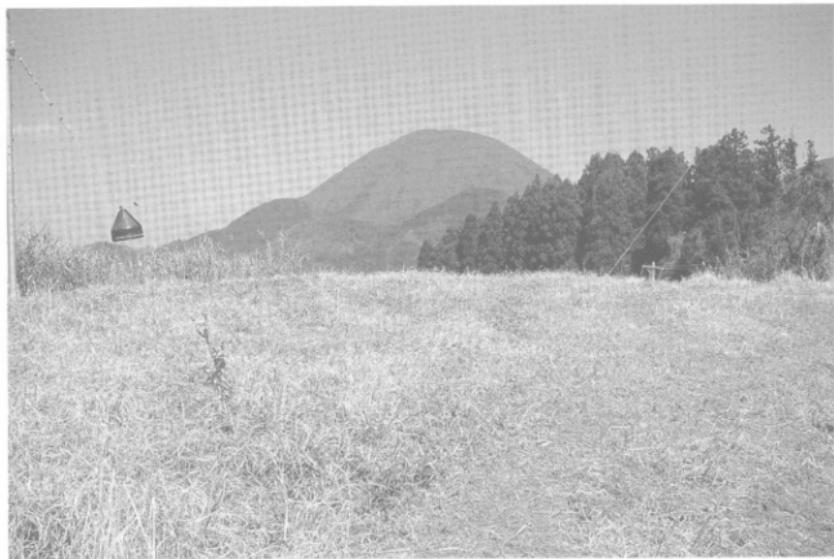
1 陶晴賢本陣跡近景（北から）



2 陶晴賢本陣跡から見た津和野城と城下町



1 調査前状況（北から）



2 調査前状況（南西から）



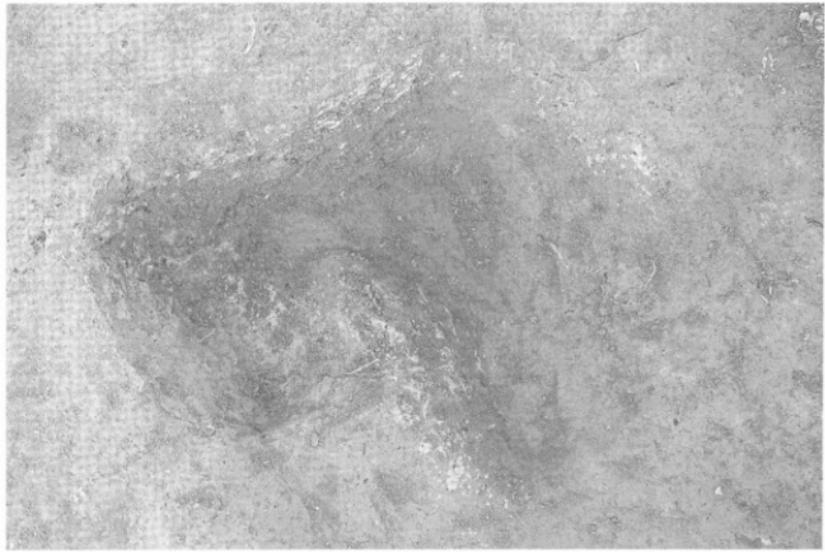
1 A 調査区東壁



2 B 調査区東壁



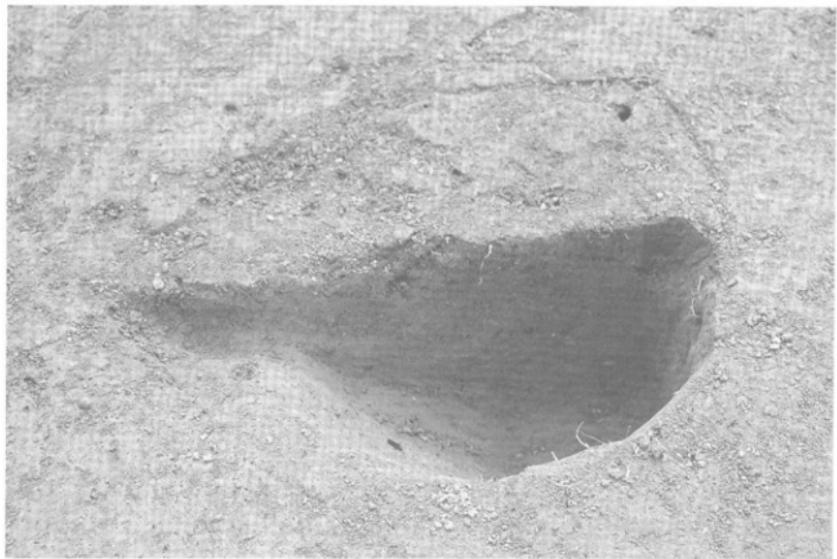
1 SK01 検出状況



2 SK01 完成状況



1 SK02 検出状況



2 SK02 半堀状況